

離島農村社会の結婚事情と少子高齢化

沖永良部郷土研究会

川上 忠志

世の中、少子高齢化と人口減少の時代に入り込んだ。離島農村の田畑にも子供の声が聞こえなくなって久しい。かつてはあちこちの畑で子供達の歓声がこだましていた。

沖永良部島は1993年（平成5年）から97年までの5年間の人口動態統計の特殊報告で合計特殊出生率（一人の女性が生涯に産む平均の子供数）が和泊町は2.58で全国1位になり、知名町も2.48で5位、天城町や伊仙町と上位を奄美が占めた。

なんでも厚生省の人口問題研究所が調べたらしい。「お役人さんは面白いものを調べるものだね！ それまで気にもかけずに「子供は宝だ」と家族や集落皆で育ててきたのに全国1位と発表されると「全国一アレ！が好き」と思われそうで嬉しいやら恥ずかしいやら、あと一人欲しいのに産めなくなった？……」との冗談めいた声も聞く。

全国1位だからと言っても沖永良部島に子供たちがうようよといるわけではない、やはり少子高齢化に変わりはないし結婚難で人口は減少している。結婚難は全国共通する悩み、沖永良部だけの問題ではないが、それを解決する手立ては今の所見つかからない。

沖永良部島は鹿児島から南へ約536KM、周囲は約56KMの平らな小さな島です。隆起珊瑚礁からなり、平均気温22度で気候も温暖で暖かい風土に恵まれ四季を通じて亜熱帯の花々が咲き、切花出荷が盛んで「花と鍾乳洞の島」と言われている。また奄美諸島の中で、与論島、喜界島と共にハブがいない島で住民はのんびりしている。

山々が多い奄美大島本島と違い沖永良部は平坦で耕地面積が広い、農業が盛んで花栽培が高所得を生み出して比較的に豊である。しかしそれでも全国平均の7割程度ではなかろうか、それに離島の物価高がある。貧乏ではあるが豊に子育てをしている。子供は天からの授かり物で地域でも相互扶養の精神で子育てが行われていると言える。農業の確固とした経済基盤の上に安心して出産や育児ができる社会環境があると思う。

しかしそれは恵まれて結婚できた人たちの話である。結婚難を少しでも解消しようと和泊町では昭和63年10月に「町結婚相談員協議会」をスタートさせた。事務局を役場社会教育課に置き、各集落から区長の推薦を受けた23人の結婚相談員が縁結びの役割を担う。私もスタート時から相談員を引き受け、平成6年頃には協議会会長として各種お見合いイベントやTBSテレビを誘致「お見合い大作戦」を企画、タレントの松元伊代さんや佐藤B作さんらが都会から80人の独身女性を連れてきて島の男性とお見合いをさせ十数組のカップルを誕生させた。全国放送され反響が大きくその後も島の男性と結婚したいと来る女性達が多かった。

データは古いが、1994年(平成6年)の和泊町の人口は約8000人前後、その内20歳から45歳までの独身男性が約300人、対し女性は約50人ほど、圧倒的に男性が多い、結婚難である。働きづめの男性達が結婚して楽しい家庭生活を味わうことも無く一生を終るのかと思うと可愛そうでせつない。地域の活性化なども考え一人でも多くのカップルをと思いプライバシーを守りながら地道な努力をした。しかしながら約10年間もすると時代が変わり制度が必要無くなり、また町の予算不足などもあり解散した。しかし今でも結婚難が解消したとは聞いていない。ただ「結婚しきらないのは本人の努力不足だ」と言う声も聞く、それだけで片付けていいものだろうか?。町の予算もだいぶ使った、10年間で約100組近いカップル誕生は特殊出生率全国一や人口増に少しは貢献したことだろうと思う。

2005年2月